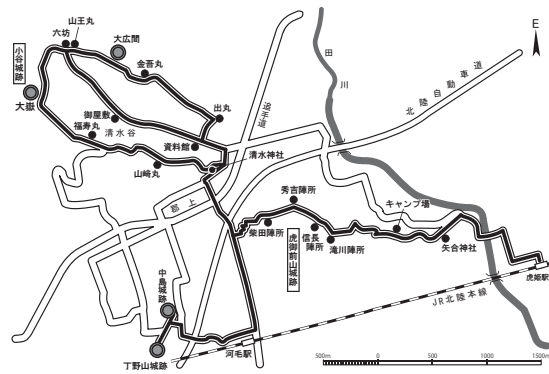


小谷城跡をめぐる城々

－ 元亀争乱の舞台 －



アクセスマップ

- ・小谷城へはJR河毛駅から、小谷城戦国資料館および大手道登山口まで徒歩30分。
- ・丁野山城へはJR河毛駅から登山口まで徒歩15分。
- ・虎御前山へはJR河毛駅から北登山口まで徒歩20分、もしくはJR虎姫駅から南登山口まで徒歩15分。
- ・山本山城へはJR河毛駅からバスで山本三条橋下車、朝日山神社登山口まで徒歩10分。

小谷城跡等を見学されるみなさんへ

見学にあたっては、十分な準備をして登山し、怪我のないよう安全に努めてください。城跡は大切な文化財です。マナーを守り、ゴミは各自で持ち帰るなどして、城跡の美化と保護に努めましょう。喫煙をはじめ、山での火の使用はやめましょう。

埋蔵文化財活用ブックレット7（近江の城郭2）
小谷城跡をめぐる城々

刊行：平成23年9月12日
編集：滋賀県教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674・FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp
印刷：近江印刷株式会社



目次

1. 浅井氏と小谷城	1
2. 元亀争乱	2
3. 小谷城の構造	
●三つに分類される曲輪群	4
●本城にみる南北二群の曲輪群	4
4. 小谷城の発掘調査	
●本城の南曲輪群	8
●本城の北曲輪群	10
●浅井氏の権力	10
5. 小谷城下町	
●水陸交通の結節点	12
●惣構	12
●武家屋敷地区	12
●町屋地区	12
6. 虎御前山城	
●位置と歴史	14
●八相山の曲輪群	16
●虎御前山の曲輪群	16
7. 丁野山城	20
8. 山本山城	23

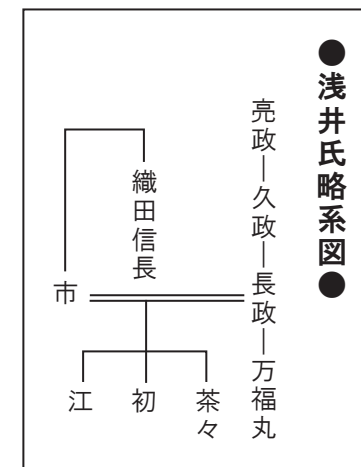
本埋蔵文化財活用ブックレットは、滋賀県教育委員会が国庫補助金（史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費）を受け、長浜市教育委員会と彦根城博物館の協力（写真提供）を得て原稿を作成し刊行しました。

表紙写真：小谷山古城図（重要文化財・彦根藩井伊家文書、彦根城博物館蔵）

1. 浅井氏と小谷城

浅井氏（あざいし）の出自は明確ではありませんが、近江国浅井郡丁野郷（長浜市小谷丁野町、おだによのちょう）を本拠とする土豪で、北近江を支配した京極氏の被官だったことは間違いのないようです。浅井氏が歴史の上に登場するのは長政の祖父亮政（すけまさ）の代からです。北近江の国人（こくじん）たちが連合した一揆のメンバーだった亮政は、主君京極高きの後継者をめぐる争いを利用して、北近江の覇権を握りました。しかし亮政の子久政の代には南近江に勢力を誇っていた近江守護六角氏に圧倒され、これに従属するようになります。こうした状況に不満を募らせた嫡男長政は家臣たちと共謀して久政を隠居させます。永禄3年（1560）の野良田の戦いで六角氏を打ち破った浅井長政は、これ以後自立した一個の領主権力として北近江を支配することとなります。

この浅井氏の居城が小谷城です。標高 495mの小谷山に築かれた小谷城は、戦国五大山城の一つにも数えられる巨大城郭として知られています。築城時期は明らかではありませんが、亮政が京極父子を小谷城に迎えた大永5年（1525）頃以前と考えられています。しかし織田信長との戦いに敗れ、天正元年（1573）に小谷城はついに落城します。その後は浅井氏の旧領を与えられた羽柴秀吉が一時居城としますが、長浜城完成によって廃城となったようです。

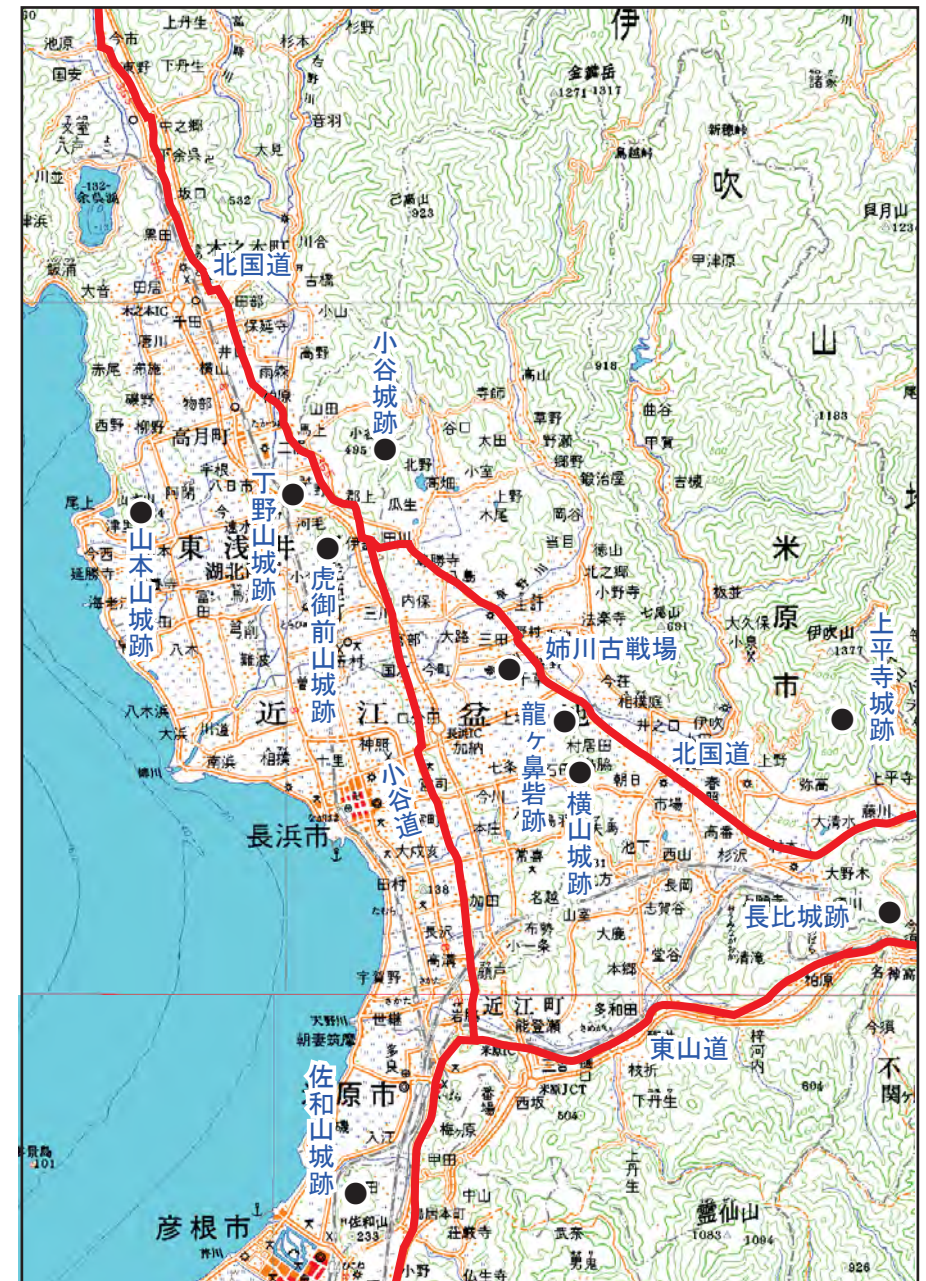


■ 2. 元亀争乱 ■

元亀（げんき）元年（1570）4月、朝倉氏を討ち果たすため越前国に入った織田信長は浅井長政に裏切られ、急遽湖西路を京へと駆け戻ります。これが、この後4年に渡り、信長と近江の諸勢力が戦った元亀争乱の始まりでした。

長政は、信長の妹お市の方を妻とするなど、織田家とは友好的な関係を築いていました。それがなぜ裏切ることとなったのかは明らかではありません。ともかく危機を脱した信長は一旦岐阜に戻ったあと再び近江に出陣し、6月、姉川の合戦で浅井・朝倉連合軍を打ち破ります。勢いに乗って小谷城を攻撃しようとしたのですが、容易には城を落とせず、小谷山の南方に位置する横山城を奪い取って木下秀吉を城番とし、小谷城を監視させます。

その後、毎年のように北近江に出陣した信長ですがなかなか小谷城を落とせません。それは小谷城の堅牢さもありますが、丁野山城・山本山城と、小谷城の西方に支城を配置したことも見逃せません。このため、信長は小谷城の北方に回ることができず、朝倉氏との連絡を絶てなかったのです。元亀3年（1572）、信長は小谷城の目前にある虎御前山城（とらごぜんやまじょう）の本格的な普請を行い、横山城との連携を強化して小谷攻撃に本腰を入れる姿勢を見せます。そして翌天正元年、山本山城を守る阿閉貞征（あつじさだゆき）の調略に成功し、ようやく小谷城の両面攻撃が可能になったことで、まずは援軍に来ていた越前衆を攻撃し、そのまま越前まで追撃して朝倉氏を滅ぼした後、いよいよ小谷城攻撃に移ります。木下秀吉を先陣とする織田軍の総攻撃の前に小谷城は落城し、久政・長政父子は自刃。お市の方は三人の娘を連れて信長軍に降りました。



元亀争乱関係図(1 : 200,000)

■ 3. 小谷城の構造 ■

● 三つに分類される曲輪群

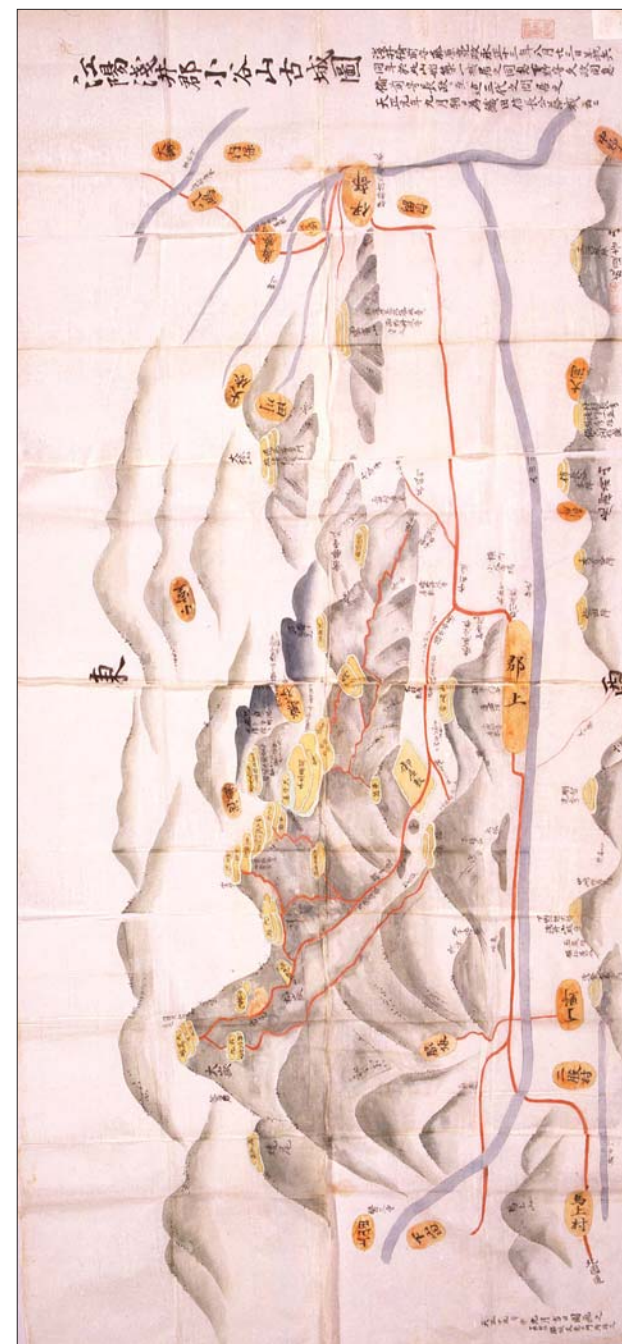
小谷城を構成する曲輪（くるわ）は三つに分類できます。一つは清水谷（きよみずだに）東側尾根上につらなる大規模な曲輪群で、しばしば本城とよばれます。二つは出城的な曲輪で、大嶽（おおづく）や山崎丸・金吾丸・出丸などが山上の要所に点在します。三つは簡易な造成の小規模な曲輪で、斜面地に鱗状につらなります。これは信長に攻められた元亀年間（1570～73）に急造されたと見られます。

● 本城にみる南北二群の曲輪群

小谷城本城（清水谷東側尾根上の曲輪群）は、中央の大堀切を境に南北に二分されます。南北両群とも北側のピークから南側にむかって階段状の曲輪群が連なり、よく似た構造をもちます。ただし、標高は北群が南群よりも高く、通路も北群は曲輪内を通過する一方、南群は曲輪の横付けに通過するという特徴があります。



小谷城遠景（南西から）



小谷山古城図（重要文化財・彦根藩井伊家文書、彦根城博物館蔵）

小谷城縄張図



■ 4. 小谷城の発掘調査 ■

小谷城は昭和 12 年（1937）に史跡に指定されました。そして、昭和 45～50 年（1970～75）、本城の南北両群にわたる山王丸から番所にかけて発掘調査がおこなわれ、整備工事が実施されています。

● 本城の南曲輪群

南群のピークにある鐘丸の発掘調査では 3 棟分以上の建物礎石群が検出され、御殿のあったことが判明しました。

その下段の大広間は小谷城最大の曲輪で、東西約 35m×南北約 85m、約 3000 m²を測ります。ここでも南北二群の御殿跡がみつき、多数の日常雑器がみついています。とくに北側の御殿付近には、蔵跡と推定される石敷遺構や、石組溝が付属する石組遺構が検出され、鋳物作業をしていた痕跡も発見されました。

さらに桜馬場でも御殿跡が見つかり、その下段には馬洗い池と称する井戸曲輪もありますので、当時この山上で人々が生活していたことは確実です。

そして、これらの発掘調査の成果のなかでも、特に注目されることは、大広間の南側の御殿跡を中心とした範囲で、土師器が三万点以上も出土していることです。土師器は土製の酒杯やお皿ですから、ここで盛んに酒宴を伴う儀式がおこなわれていたことが知られます。また古文書等によると、浅井氏は争いごとがあると、その当事者に小谷登城を求めていますから、ここで裁判や儀式、政治がおこなわれたことも知られます。

南曲輪群の鐘丸、大広間、そして桜馬場付近に浅井氏権力の実務的な中枢があったことはほぼ間違いのないでしょう。



小谷城大広間（現在、北東から）



小谷城大広間（整備直後、北東から）

● 本城の北曲輪群

北群は中丸以北にあたります。ピークは山王丸（さんのおまる）にあり、山王社が祀られていました。そして、その下段には京極丸があり、京極氏が住んでいたと推測されます。京極丸は面積が約 1900 m²あり、本城の曲輪のなかでは大広間について二番目に広い曲輪です。発掘調査では、多数の日常雑器が出土したほか、儀式用の土師器皿も約 2700 点が出土しています。礎石とみられる多数の河原石のほか、庭石らしい山石や玉石敷も認められたことから、ここには御殿が存在したと推測されます。京極丸はまさにその名が示すように、京極氏のために築かれた曲輪でしょう。

● 浅井氏の権力

小谷城本城のうち、北曲輪群は上平寺館（米原市）をモデルにつくられた江北守護所、南曲輪群はそれを支える浅井氏の実務空間と見ることができます。小谷城の構造をこのように理解すると、浅井氏は京極氏を守護として奉じ、その執権として権力をふるったことがうかがえます。



発掘調査状況（小谷城大広間、北東から）



小谷城京極丸（北西から）



小谷城山王丸大石垣（北東から）

■ 5. 小谷城下町 ■

● 水陸交通の結節点

小谷城は北陸と東海、そして畿内とを相互にむすぶ水陸交通の結節点に位置しました。すなわち、京都を起点とする東山道は箕浦（米原市）付近で北側に分岐します。この北への分かれ道が小谷道（山西街道）であり、北進して小谷城下で北国道（北国脇往還）と出会います。北国道は越前（福井県）と美濃（岐阜県）とを結ぶ幹線道路です。そして、この両道の交差点付近を流れる田川の舟運は、姉川を経て琵琶湖の湖上交通につながっていました。

● 惣構

城下町の中心は小谷山の南麓にあり、その東側は沼地、西側は旧山田川によって限られていました。また町の南北両側は土塁や堀によって閉じられていました。これを町の惣構（そうがまえ）と言います。

● 武家屋敷地区

武家屋敷地区は惣構の内側にありました。その中心は小谷山を背負った清水谷にあり、そこには浅井氏やその一族および重臣屋敷がひろがるなかに、浅井氏の菩提寺と伝わる徳昌寺などの寺院や神社が点在していました。

● 町屋地区

町屋地区の中心は惣構内外の北国道沿いに形成されました。惣構内では清水谷口の知善院の門前に市場（大谷市場）が立ち、次第に呉服町・金屋と言った同業者町も形成されていったようです。浅井氏の滅亡後、これらの町屋は、惣構の外側にいとなまれた郡上や伊部の町屋の一部とともに、羽柴秀吉によって、長浜城下町に移転されました。



小谷城下町の復元模式図（北村圭弘氏作図）

■ 6. 虎御前山城 ■

● 位置と歴史

小谷城の南西側に、南北 4.3 kmにわたる独立丘陵があります。これが虎御前山で、南端の尾根は八相山と称しています。この山の南東から北西にかけては北国道、西には高時川、東には小谷道、南には田川、北には山本山城にむかう尾上道（おのえみち）が通るといふ要衝にあります。

虎御前山城には浅井氏の旗頭「海赤雨（海北・赤尾・雨森）の三士」の一人といふ赤尾清綱の砦があったといわれています。姉川合戦直前の元亀元年6月21日、織田信長は虎御前山に布陣しますが、本格的な築城にかかるのは元亀3年7月27日からで、同年8月9日に完成すると、城番として羽柴藤吉郎を置き、小谷城落城に至るまで織田軍の前線基地としました。丘陵尾根上の北側約4分の3にみられる曲輪は、このときの状況を伝えていると推測されます。



虎御前山城遠景（小谷城跡から、北東から）



虎御前山古砦図（重要文化財・彦根藩井伊家文書、彦根城博物館蔵）

● 八相山の曲輪群

①伝多賀貞能（さだたか）陣所

虎御前山の最南端の八相山に位置し、虎御前山城に築かれた曲輪のなかでは一番低い位置にあります。矢合神社の境内一帯がこれにあたりますが、かなり削平されています。

②伝蜂屋頼隆陣所

矢合神社の社殿裏側の北尾根続きにあります。曲輪内に前方後円墳が1基あり、北側には左右に小土塁が設けられた虎口の前面に、一文字状の土塁が設けられています。



矢合神社（南東から）

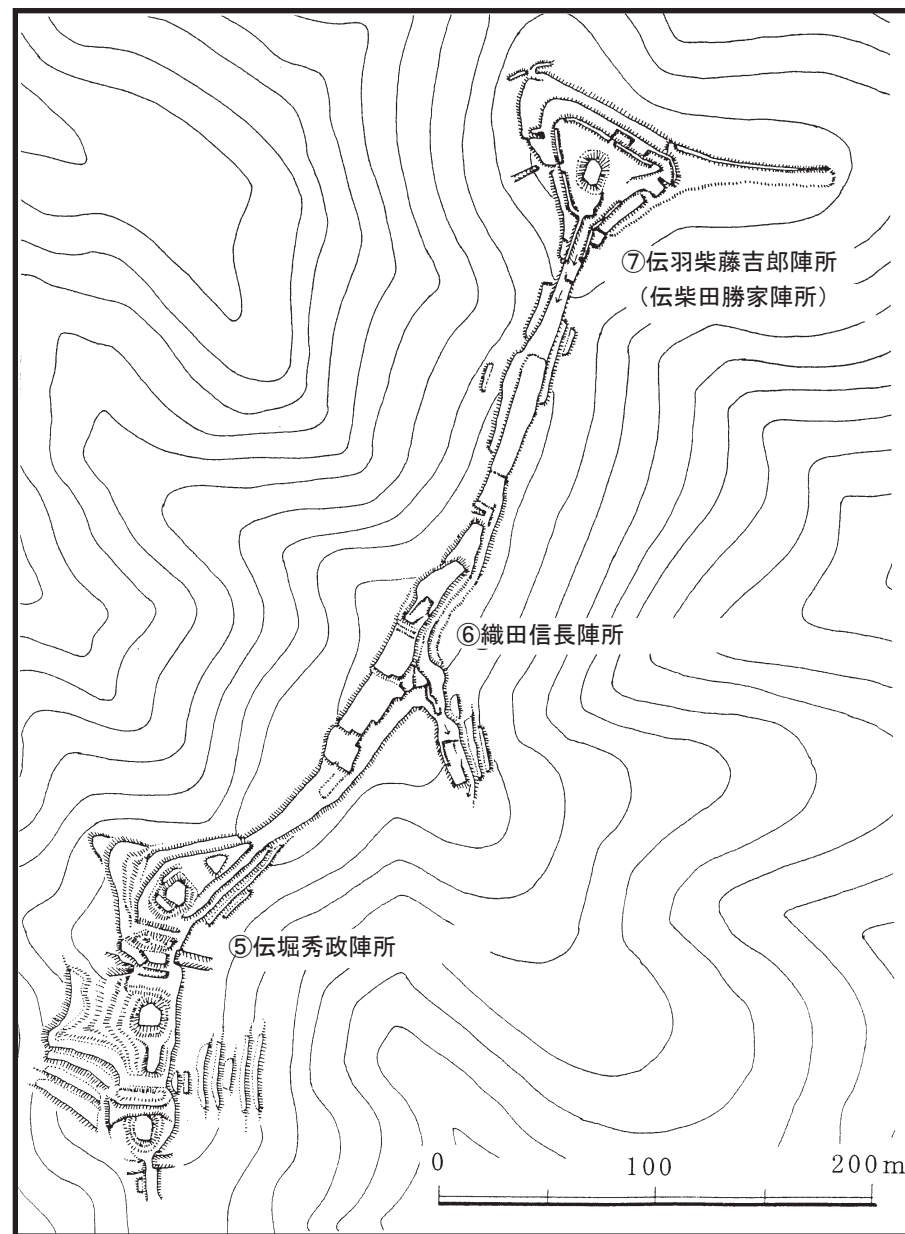
● 虎御前山の曲輪群

③伝丹羽長秀陣所

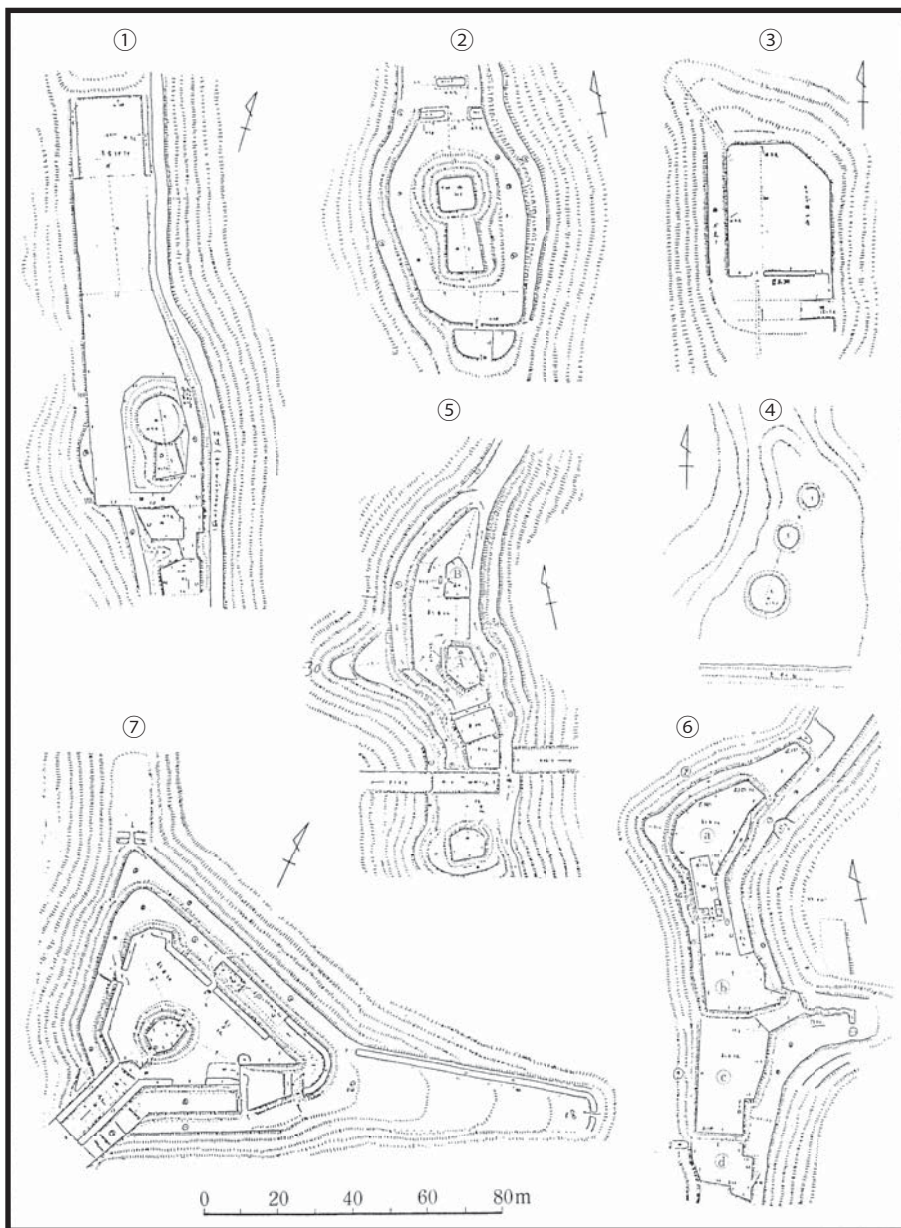
長方形に近い台地になっており、キャンプ用の小屋が建てられて完全に削平されています。

④伝滝川一益陣所

現地は大きく削平されてパラボラアンテナが建っています。円墳らしきマウンド3基があります。



虎御前山城の中枢部の縄張図
（『滋賀県中世城郭分布調査7』より）



虎御前山城の各曲輪の縄張図

(長谷川博美作図『図説中世城郭事典』第2巻から抜粋)

⑤伝堀秀政陣所

堀切で画された3箇所の曲輪に、それぞれ円墳を利用した櫓台（やぐらだい）状の高まりがあります。北端の曲輪に信長本陣跡の碑が建っています。

⑥伝織田信長陣所

南北に5箇所の曲輪が並び、南東の尾根上にも細長い曲輪が延びています。北側から2番目の曲輪は、北・西・東の三方を高い切岸で防御します。ここは最高所に位置することから、信長の本陣が置かれた可能性が高いと推測できます。南側にある曲輪の東側は折れをもつ切岸となっています。

⑦伝羽柴藤吉郎（柴田勝家）陣所

一辺50mの三角形のプランをベースとした曲輪と2・3段の帯状曲輪からなり、中心部に古墳（円墳か）を利用した13m×9mの楕円形状の櫓台と推定される小丘（高さ約3.6m）があります。三角形の曲輪には掻き上げ状の低土塁が断続的に設けられています。東側の虎口をくぐると北側（小谷城側）に低土塁を付設する帯曲輪が70m先まで延びています。この帯曲輪が佐久間信盛の陣所とされています。また、南側の織田信長陣所に続く虎口は両側約23mを土塁で固めた堀状通路を形成しています。

他の曲輪があまり土塁を伴わず、その周囲のほとんどを切岸状に形成するのに対し、この曲輪は周囲を土塁で囲み、先線帯曲輪の北国道に対峙する側にも土塁を作るなど特異性が見られます。こうした特徴を古いとみなせば、赤尾清綱の元陣城であったと考えられますし、新しいと見なせば、天正10年（1583）の賤ヶ岳合戦にあたり、秀吉が改修した土塁ということになります。

■ 7. 丁野山城 ■

小谷山のほぼ真西に築かれた山城です。城の位置からは小谷城の防衛のために配置された支城の一つと推測され、小谷城攻防戦に際しては、朝倉氏が浅井氏の援軍として越前から派遣した平泉寺玉泉坊が在城したと伝えられています。天正元年(1573)8月12日の戦闘で、織田方の攻撃によって玉泉坊が降伏し、丁野山城は落城しました。その後は廃城となったようです。

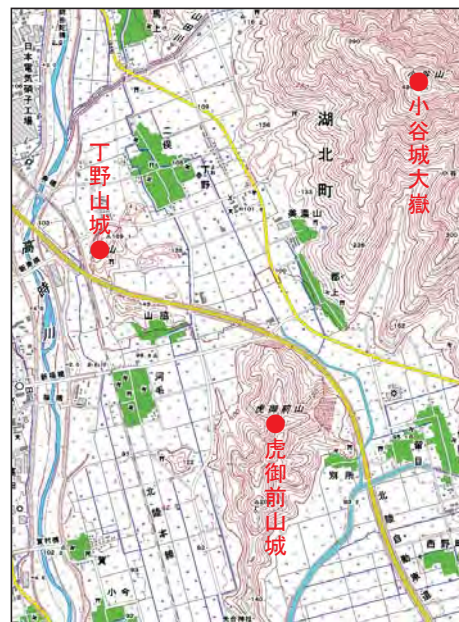
城が築かれた丁野山(岡山)は、西側に高時川が流れ、東側には低湿地が広がる天然の要害といえます。山頂から南東に延びる尾根上には中島城も築かれており、この二つの支城で小谷城の西側の防御を担っていたと考えられます。

城の中心遺構は岡山の山頂部に見られます。南北両側の尾根に堀切を設け、堀切間の尾根上にはほぼ方形に削り出された曲輪(南北約20.5m×東西約19.5m)があり、周囲にはそれをめぐる帯曲輪を配しています。中央に配置された方形曲輪の周囲には土塁がなく、一段下がった部分の外側に土塁が巡らされています。この土塁の外側のもう一段低い部分にも帯曲輪がつけられています。また、南側の尾根に配された2本の堀切は、南北にズレをもって掘られており、食い違い虎口に似た形をした防御施設となっています。このような構造は、周囲に築かれた城の曲輪の構造とは異なっており、丁野山城の特色となっています。

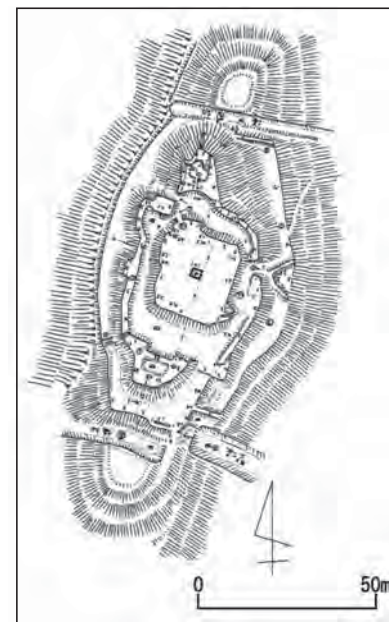
なお、城の南東麓には弥勒寺(現在の谷田神社)があり、その西側尾根上には山王宮(谷田神社の前身か)が営まれていました。そして『近江輿地志略』によると、浅井亮政がこの山王宮に参詣した際、社前の池が光っていたので、池底を探らせたところ、千手観音像を得たと伝えています。



南方上空から見た丁野山城



丁野山城等の位置図



丁野山城縄張図(P17文献より)



丁野山古岩図（重要文化財・彦根藩井伊家文書、彦根城博物館蔵）

■ 8. 山本山城 ■

小谷城の西方、琵琶湖岸の山本山に位置します。山頂にある城跡からは、眼下に尾上港をにらみ、琵琶湖の北湖一帯を眺望できます。標高 324m の山城ですが、湖上交通の掌握を目指したと言う点では、湖城ともいべき存在です。

山本山城の歴史はふるく、治承 4 年（1180）に平知盛らが攻めた「近江山下城（おうみやまもとじょう）」はこの山本山城と考えられています。くだって大永 3 年（1523）、浅見貞則（さだのり）が京極高慶を擁した「小野江城」も、おそらくこの山本山城だったと推測されます。そして、元龜元年（1570）にはじまった小谷城攻防戦当時は小谷城の有力な支城であり、浅井氏の有力家臣阿閉貞征が城主として小谷城防衛の重要な役割を担っていました。そのため、織田軍の激しい攻撃を受けましたが、長らくよくもちこたえました。しかし、天正元年（1573）8 月、阿閉氏はついに浅井氏を見限り降伏。このことが直接の契機となって、約 1 ヶ月後の 9 月 1 日、浅井氏は滅亡しました。

山本山城にのこる遺構は戦国期のもので、山頂部と周囲の尾根上に配置された曲輪や堀切で構成されています。特に北に向かって延びる細い尾根には、6 本の堀切と 8 箇所の曲輪を交互に配置しており、曲輪の多くは周囲に土塁を伴っています。山頂部に位置する主郭（南北約 38m × 東西約 23m）は、平面がほぼ方形を呈して周囲に土塁が築かれています。虎口はこの土塁の東側と北側に設けられています（南側の開口は虎口でなく、土塁の損壊）。また、現在は失われていますが、主郭の南側にも曲輪が築かれていたと考えられています。主郭から東に約 50m 離れた尾根の頂部にも周囲を土塁で囲み虎口を設けた曲輪があります。



小谷城大嶽から見た山本山城（右）と丁野山城（左）
中央は琵琶湖にうかぶ竹生島（東から）



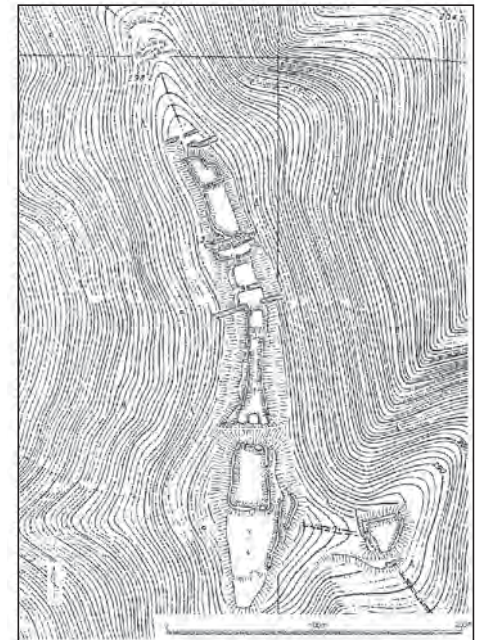
山本山城の遺構（北西から）



美しい姿を見せる山本山（南から）



山本山城の位置図



山本山城の縄張図（P17文献より）